校長室だより～燦燦～ №１８９

こわい人その４

2020.9.10

その後も、なぜか「こわい人」との縁は続いた。あるとき、突然声をかけられ、「高澤先生、『〇〇』やってくれない」とのことだった。そこには、よくわからないままに「はい、わかりました」と答える自分がいた。断ることなどできるわけがない。

これがまた、びびりの連続であった。あの方が、いったい何を言うのか、どんな要求をされるのかと、戦々恐々としていたものである。今思い返すと、数年にわたり鍛えていただいた。たまたまの出会いではあったが、国語教師である私には、とてもとても大きな出会いである。この出会いがなかったらと思うと、恐ろしくさえある。

以前勤めた職場では、国語の研修の中で、こわい人との４回にわたる研究授業の中身について話したりしたものである。毎年少しずつ授業を変えていくことは大切である。だが、本気になって短期間で授業を変えるエネルギーも必要だと思うのである。私の場合は、「こわい人」が４回もその機会をつくってくださったわけである。こわいのだが、すごい方であることは間違いない。出会いがすべてである。ピンチだと思われることは、実はチャンスなのである。

私は、「こわい人」に鍛えていただいた。しかし、残念ながら評価されていたわけではない。その証拠に、「高澤先生というと、奥さんの方の説明文の実践はすばらしかったなあ。～」というような話をされたことがある。私の前で妻の実践を褒めていただいたのである。自分でもわかってはいたが、「こわい人」の要求水準には全く達していなかったのである。

「こわい人」は、仕事として私を指導しただけだと思う。しかし、指導される側の私が、それを出会いとして、チャンスとして生かすことができたということなのだと考える。管理職や指導主事などをやっていると、こちらは仕事としてやっているのだが、相手にとっては、それが大きな転機となることがあると思う。だから、一つ一つの仕事に、誠実に誠意をもって取り組まなければならないと思うのである。私の場合は、“おせっかい”が過ぎるのだが。

「こわい人」からいただいた資料等は、「〇〇ファイル」として保管してある。今でも必要なときに、このすごいファイルを使わせていただいている。私の場合には、他にも「〇〇ファイル」というものが数冊ある。すべて、すごい方々の資料が綴じてある。一流の方々が言うこと、つくるものは違う。

いつだったか、お正月のサッポロビール「大人エレベーター」で坂本龍一氏が言っていた。「人間なんて弱いものだから、こわい人の存在が必要なんだ」みなさんにも、「こわい人」はいらっしゃるだろうか。私ほどびびる必要はないが、人として教師として成長するためには、「こわい人」の存在は必要だと思うのである。嫌なんだけど必要な人、大切な人である。

今言えることは、少なくとも、出会いから逃げないことである。逃げれば、それは出会いではなくなる。チャンスが遠ざかってしまう。歯を食いしばり、こわくてもいい、びびってもいい、踏みとどまることである。そうすれば、何かが変わる。